本と地域の情報誌
県北 どらくろあ
第28号　2018年7月1日（毎月1日発行）

県北群星伝⑭ 国際人の英語講師

山崎允（まこと） 75歳（庄原市東城町）

「最近は生徒が学校の外で会ったときに、英語で話しかけてくれるんですよ」

山崎允さんは金曜日の午後、地元の八幡小学校の「いい山子供塾」で英語を教えている。一年生と二年生、三年生と四年生、五年生と六年生、計三クラスの英語の授業を担当している。日常生活や行事、学校での活動などの身近な題材をテーマに、教材を手作りすることも多いという。見て、聞いて、しゃべって、実際に使って楽しんでもらう。

アウトドア派の山崎さんは
自宅の外の軒下が「仕事場」だ。

英語検定試験に挑戦することも奨励している。目標があれば、勉強にも熱が入る。英語が話せるようになれば、日本国外にも興味を持つ。将来はどんどん外国に出かけて行き、国際的に活躍する人材に育ってほしい、山崎さんの願いである。

山崎さんは大学を卒業後、得意の英語力を生かすために旅行会社に就職。阪急交通社でインバウンド（訪日旅行）を、転職した旅行社でアウトバウンド（海外旅行）を担当する。その後、観光専門学校の講師を務めていたが、定年退職の一年前に、ＪＩＣＡ（独立行政法人国際協力機構）のシニア海外ボランティア（以下ＳＶ）に応募する。

「バスの中で広告を見て、すぐに資料をもらいに行きました。資料を見たら、ザンビアに観光客を誘致する仕事がある。これは自分の経験が役立つと思いました」

ツアーコンダクターとして、アマゾンの秘境地にも出かけた山崎さんにとって、アフリカの未知なる国は、不安ではなく魅力だったのだろう。

ＳＶの年齢制限は40歳～69歳。派遣期間は原則二年間で、現役時代の技術や経験を重視する要請内容が多く、書類審査と面接、健康診断などを経て採用される。派遣前には語学を中心とした60日前後の派遣前訓練を受ける。無報酬だが、ＪＩＣＡから現地の生活費が支給される。

英語が話せる山崎さんは、派遣前訓練を免除されて、退職して一カ月後には単身、ザンビア共和国の首都ルサカに向かっていた。

「旅行客の誘致を促進するため現地を視察し、宿泊・食事等を加えて旅行商品に仕立てる。お客を募集し、旅行を実施。その評価を集めて、英文の反省文と提案分のレポート作成を繰り返しました」

その他にも、カウンター・パートと呼ばれる直近の職員の教育がある。一緒に活動しながら、技術や知識を指導する。山崎さんは三人のカウンター・パートを指導した。

山崎さんのＳＶの任期は２００４年10月までの予定だったが、２００５年の愛知万博にザンビアもパビリオンを出展することになり、その手伝いのために半年間任期が延長された。帰国後始まった

万博では、ボランティアスタッフとして半年間にわたり会場で、ザンビア共和国の紹介に努めた。

その後も、SVのときに作成した旅程計画を実現するために東京のザンビア大使館の職員と旅行会社を回るなど、ザンビアの観光資源開発に尽力。そうした活動が認められて、山崎さんはザンビアの観光大使に任命されている。任期は無制限だ。

山崎さんがボランティア活動に初めて参加したのは、肢体に障害がある方たちの宿泊を伴う旅行だった。海外からの障害を持つ旅行者のために、受け入れのノウハウを学ぶのが目的だったが、実際に体験することの重要さを痛感した。

車椅子が使えるかどうかの入念なチェックはもちろんのこと、お客様を抱え上げてバスのステップを上り下りする体力も必要だった。今ではリフト付きのバスがあるので大丈夫だが、その当時からの習慣で、山崎さんは今でも毎日の約5キロのランニングと約1キロのスイミングを欠かしていない。

頭の中で考えているだけでは、何も始まらない。たくさんの経験を積み重ねて、いろんな人と出会って、人生を豊かにしてもらいたい。そのためにも、海外に出てほしい。日本という国を外からながめることで気づくことが多い。山崎さん自身、ザンビアの人々の貧困を目の当たりにして、日本の豊かさや平和のありがたさを再認識している。清潔なトイレだけでもすばらしいことなのだ。

国際的な視野で活躍する若者が増えてくれることを期待している。そして、困っている人を助けるやさしさ、心の余裕を持ってもらいたいと願っている。小学校の英語の塾で、海外での体験談を話すこともあるという。

山崎さんは東京生まれだが、戦時中に東城町川鳥にある父親の実家に疎開、中学一年まで過ごした。阪神大震災のときに神戸の自宅が倒壊、母親が住むその家に、家族で身を寄せていた時期がある。

後年、豊かな自然の中での生活を目的に、空き家になっていた川鳥の家に移住。山崎さんは「英語」、奥さんの知子さんは神戸で主催していた「子供バレエ教室」の経験を生かして、ボランティア活動を続けている。

新・図書館員ノート「思い出の一冊」④

「わたしとあそんで」（福音館書店）

淡いレモン色の絵本。表紙に描かれた少女が、こちらを見つめている。

朝の原っぱで少女（わたし）を包む、ゆったりとして静かな時間（とき）が、今の自分には、きらきらと輝いて見える。

原っぱにいるばったやかえる、かめ、りす、かけすにうさぎ、へびにまで「あそびましょ。」と声をかけて捕まえようとするけれど、みんな行ってしまう。ところが、音を立てずに腰かけてじっとしていると、やがてみんなが戻ってきて、わたしとあそんでくれるというストーリーだ。1955年にアメリカで出版され、1968年に日本で出版された、ご長寿絵本だ。

さて、私がこの本に出会ったのは、かれこれ24年前。司書になりたての頃、先輩のSさんに教えていただいた、たくさんの本の中の一冊。

「何が言いたいんだか…」「淡い色合いで、読み語りには不向きだわ」等々、当時の私は、この本の素晴らしさを感じることは出来なかった。

ところがやがて時がたち、ここ数年じわじわと沁みてくる。そして、Sさんの微笑む顔と優しい声が一緒に蘇ってきて、私に原点を思い出させてくれる。いわば、私にとってのお守りのような一冊となった。

ときどき、空を見上げてSさんに話しかける。そして、この本のページをめくる。いつの間にか心が穏やかに。この本と、この本を手渡してくれたSさんに出会えた幸運に改めて感謝したい。教えてもらった懐かしい本たちをもう一度手に取り、今の自分にどう映るか、試してみたい。

63年もの長い間世界中で読み継がれてきたこの本は、本当に偉大だ！

（三次市立図書館員によるリレーエッセイ、執筆者の似顔絵は有光館長作）

また読んでみたい本㉘
――――青年たちに

音谷 健郎

【角川ソフィア文庫版の表紙】

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月１冊ずつ紹介しています。

第28回は、柳田国男の『遠野物語』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧･庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

柳田国男『遠野物語』
――遠い昔の話ではありません

この本は小説ではありません。エッセイでもありません。作者は、「この話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり」と、断っています。民俗学の草分けとなった柳田国男『遠野（とおの）物語』は当初、「奇異で好事」と評されたといいます。明治４３（１９１０）年、自費出版で３５０部だけでした。

ここに展開するのは、１１９話の超短編の文章です。長いものでも１ページはありません。例えば、こうです。

「一〇　この男ある奥山に入り、茸（きのこ）を採るとて小屋掛け宿りてありしに、深夜に遠き処にてきやーといふ女の叫ぶ声聞こえ胸を轟かしたることあり。里へ帰りて見れば、その同じ夜、自分の妹なる女その息子のために殺されてありき」。

山人にさらわれた女、ふらりと帰ってきた女、河童に生まれた男の子を切り刻んで埋めた話、人に化けた狐、オイヌ（狼）の集団、祟（たた）り……。村に伝わる伝承が、そのまま何の解釈もなく放り出されています。とりわけ山中での出来事や怪奇談が多いことです。

共通していることは、どの話も日常からかけ離れていて、読んで怖くなるものばかりなのです。まず思い当たることは、これらが岩手県の山中にある遠野郷（現遠野市）の人々が共有していた記憶だということです。さらに当時は、山中にはマタギ（猟師）、木地師（木工細工者）、サンカ（漂白生活者）、他にも得体の知れない人たちが山にいたのでした。

柳田は、序文で奇妙な警告を発しています。「遠野よりさらに物深き所には、また無数の山神山人の伝説あるべし。願はくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ」と。日本の山深いところには、もっと奇怪な話があるはずだというのです。

柳田は後に、山中で猟をしていて、同時にみんなが異様な大きな音を聞くが、実際は何も起こっていない「天狗倒し」の現象を例に挙げて、共同の幻覚だと説明しています。つまり、半ば閉鎖された村社会で村人は、同じような心理状態に置かれるのだというのです。この概念を介在させれば、隙間だらけで薄暗い当時の民家に、オシラサマや座敷ワラシが出現するのも分かるような気がします。このような、共同体が持つ心因現象は、単に村社会だけではなく、もっと大きな単位、国家とか時代とかでもおこるのではないかと、空恐ろしくなります。

また、この本の「新版解説」（鶴見太郎）には、興味深いエピソードが語られています。『遠野物語』を愛読した文化人類学者の今西錦司は、「四一」項の話にある、秋の暮れに何百匹とも知れぬオオカミが峰を北の方へ走り過ぎたという目撃談から、日本オオカミ絶滅の生態についての糸口をつかんだというのです。伝承は、時に現実の異様なる自然現象をしっかりと見定めているということです。『遠野物語』には様々な要素が詰まっています。

近代的な家屋になって、闇の怖さからは解放されました。が、遠野に原型を見る「心因現象」は、形を変えて現代にも深く作用しているのではないでしょうか。

次回は柳田国男の『木綿以前の事』です。

虫と草木と人びとと⑯　中村慎吾

「山の歳時記・夏」

著者紹介：一九三一年、比婆郡（現・庄原市）比和町に生まれる。農学博士（九州大学）。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」（シンセイアート出版）から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

ウマノスズクサと「お菊虫」の縁（えにし）

山寄りの畑の土手から河原の土手まで、かつては広く見られたウマノスズクサも、このところめっきり減り、奇妙な形をして人目を引いていた花にもめったにお目にかかれなくなってしまった。

ウマノスズクサとは「馬の鈴草」の意味。実の形が馬の首に掛ける鈴に似ているところから名付けられたようである。庄原あたりではショーモッコと呼んでいるが、これはウマノスズクサの古名「青木香（しょうもっこう）」の名残らしい。青木香は奈良時代、薬用として進貢されていて、「延喜式」にもその名が残っている。

ウマノスズクサ
（庄原市門田町で小川光昭氏撮影）

ウマノスズクサは毒草なのに、ジャコウアゲハの幼虫はなぜか、この草の葉しか食べない。成虫になったジャコウアゲハの体内にはウマノスズクサの毒成分がたっぷりたまっている。だから鳥などはこの虫に見向きもしない。あるいは、ジャコウアゲハが天敵から身を守る知恵なのかもしれない。

ウマノスズクサを食べて育った幼虫は、やがて草の茎や小枝に絹糸を掛け、体を支えながらさなぎになる。このジャコウアゲハのさなぎを「お菊虫」と呼んだりもする。さなぎのかっこうが、人間が後ろ手に縛られているように見えることから、浄瑠璃「播州（または番町）皿屋敷」の、無実の罪で殺された女中お菊の亡霊に見立てたものらしい。

今ではお菊虫を見かけることもまれになり、ショーモッコの呼び名を知る人も少なくなった。

お菊虫からジャコウアゲハの成虫が羽化して野原をひらひらと舞い、ウマノスズクサが花盛りを迎えるころ、山里は夏の盛りとなる。

夏の使者・キビタキ

新緑のもえる林には南から多くの鳥が渡ってくる。キビタキも南から渡ってくる鳥で、中国山地の深い森に限らず、平地でもよく茂った落葉広葉樹の林なら、渡ってきてひなを育てている。

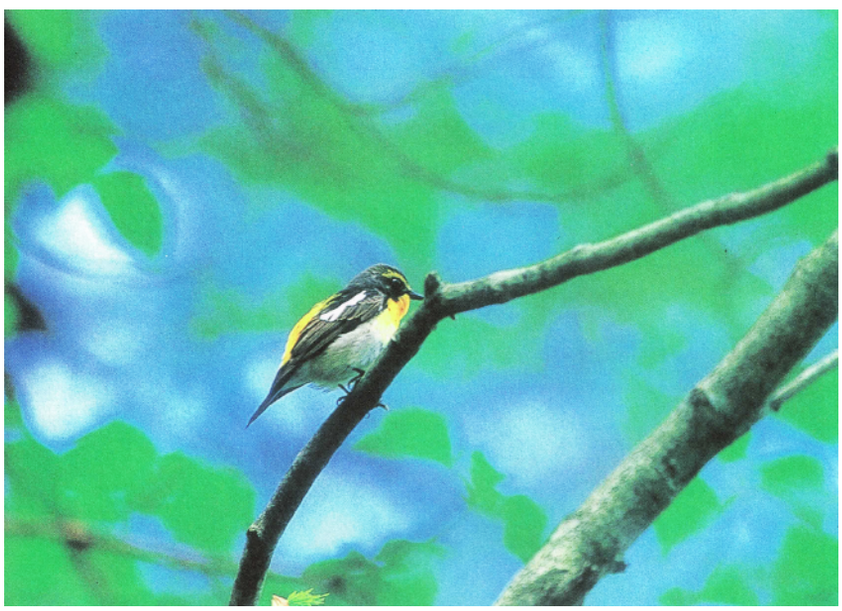
南から渡ってきて落ち着くと、雄は梢のいただきでオーシーツクツク、

ピイーピョ、ポッポロリー、ポッポロリーと、明るいさえずりを始める。その鳴き声は、日本の鳥の中で最も美しいとされているオオルリ、コマドリ、ウグイスの三名（鳴）鳥に勝るとも劣らない、美しく優しさのこもったものである。調子づくと、ピックル、ツクツクオーシ、ツクツクオーシとさえずり、「おや、ツクツクオーシが鳴いているのかな」と、一瞬、自分の耳を疑うことさえある。変化に富んだささえずりである。

やがて、林の緑の深まりとともに樹洞やキツツキのほった穴などへ、枯れ葉や苔を運び込み、お椀の形をした巣を作り、ひなを育てる。低木の茂みから高い木の梢へ、また枝から枝へとすばやく飛び移りながら餌を探し、葉陰から虫が飛び出すと、空中で見事なフライングキャッチの妙技を見せてくれる。

黄鶺（きびたき）や沢辺に多き薊（あざみ）の座
秋櫻子（しゅうおうし）

キビタキの季語は夏、ひなが巣立つころ、林は夏を迎える。しばらく家族で群れを作っているが、やがて、若鳥は群れから離れ、ひとりだちする。そして、林は夏の盛りとなる。



キビタキの雄（小川光昭氏撮影）

老いの雑記帳⑤
「ひとりで遊ぶ癖」

曽野綾子の「戒老録」というエッセイ集に「ひとりで遊ぶ癖をつけること」という一文があり、その中に次のような一節があった。

「日本の女がある時期まで、ことに一人遊びが下手だったのは、社会的な背景によるものであった。直接、家庭生活に必要のないことに、家族をおいて一人で出歩くなどというのは、むしろ反社会的なことであったろうし、女がさまざまなことから身を守るためには、常に誰かと一緒のほうが都合がよかった」そして

その文の後段には、「年をとると、友人も一人一人減っていく。いても、どこか体が悪くなったりして、ともに遊べる人は減ってしまう。誰はいなくとも、ある日、見知らぬ町を一人で見に行くような孤独に強い人間になっていなければならない。」と結んでいる。

この本を貸してくれた方は、そのページの所に栞を挟んでくれてあった。「一人でも元気を出して頑張れ！」と励ましてくれたのだと思った。

歳をとると年々友人が亡くなっていく。昨日も旧友の訃報の電話があった。「鈴木さんだけは何時までも元気でね」と励まされた。幸い今のところ大病も患っていないし、孤独にも慣れている。スナックにも週一で飲みに行けるし、ひとりで遊ぶ癖も昔からついているから、まだ大丈夫かな？

「思いのままに～新・我が心の雑記帳～」（鈴木澄夫著）より

「猫のはなし」

――現代御伽草子㉖

亜木冬彦（あきふゆひこ）

※県北の歴史や風物を題材としたファンタジー小説です。

「猫の昔話というのは、どうしてあまりいい話はないんですかね。化け猫の話が多いですよね」

マスク越しなので声がこもってしまう。猫の毛アレルギー、ドラマという雌の白猫を飼っている。この時期の大量の抜け毛で、花粉症になったこともないのに、鼻水が止まらなくなってしまった。今では薬とマスクが欠かせない。

「スキー場のある猫山にも、化け猫伝説があるからな」

隣町の西城の山本さんは、マギという雌のペルシャ猫を飼っている。

「山の形が猫に似ているから、猫山というんじゃないんですか？」

「そうだけど、化け猫も出たんだよ。猫山に捨てられて住み着いた猫が、峠を通る人を襲って食べていたそうだ」

「本物の虎みたいね」

鍼灸師の周さんは、寅というキジトラの雄猫を飼っている。フーテンの寅さんの大ファンらしい。周さんも猫の毛アレルギーなのか、大きなマスクをしている。山本さんが頷いて、話を続けた。

「熊野神社の宮司さんが大屋一の宮の祭礼に出かけた帰り、日が暮れたので鳥越峠で休んでいると、でかい猫が二匹、現れた。宮司さんは怖くてジッとしていた。大猫は辺りを探していたが、どうやら宮司さんの姿が見えないらしい。『こりゃあ、食う物ぁ無あわい』と行ってしまった。命拾いした宮司さんが熊野神社に帰ると、神社の御簾（みす）が下りている。『はっはあ、こりゃ神さんが助けてくれたんだ。この御簾が下りたために、猫にわしの姿がわからなかったんじゃ』。」

山本さんは順繰りに、わたしと周さんの顔を見た。

「だから信仰心を忘れたらいかん、猫を捨てたらいかん、お布施をけちってはいかんということだ」

強引に話を結んだ。山本さんは古いお寺の和尚さんだ。

「中国にも猫の昔話は多いです」

周さんが古本屋の店内から通りを見た。梅雨明け前で、雨が降り続いている。

「三国志時代の蜀（しょく）での話です。王建の寵臣に唐道襲という者がいた。ある夏の日、道襲が自宅で休んでいると大雨が降ってきた。家で飼っている猫が軒から落ちる雨だれにじゃれついた。伸び上がって、雨だれを捕まえようとする。道襲が眺めているうちに、猫の胴が少しずつ長くなっていく。驚いたことに、猫の前足が軒に届くほどになった。突然、激しい雷鳴が轟いたかと思うと、猫は龍と化して飛び去った」

「さすがにスケールがでかいですね。虎ではなく龍に化けましたか」

わたしは素直に感嘆した。

「うちのマギちゃんには、そんな怖いものではなく、きれいな観音様に化けてもらいたいもんだねえ」

親ばか、いや猫ばかである。

「おまえんところのノラ公は、少しはおとなくしくなったかい？」

野良猫だったドラマは、近所で何回も子猫を産み散らかしていた。仕方ないので市役所から捕獲機を借りて捕まえて、避妊手術をしてもらった。ただいま家猫の修行中。美人なので、店の看板猫にと期待している。

「すっかり仲良くなりましたよ。今は寝る時も、わたしの枕もとで眠っています」

寒い冬場は、布団の中にもぐりこんで、わたしの足の間で眠っていた。

「凄い発見をしたんですよ」

この話をしたくてウズウズしていた。

「寝ていると、わたしの髪の毛を舐めてくれるんです」

還暦を過ぎてすっかり白くなった髪の毛は、まるで猫の毛のようで、仲間内の毛づくろいのつもりか、夜行性なのでもっと遊ぼうという催促か、あるいは汗を掻いて塩気があるからなのか、時間をかけて丹念に舐めてくれる。

「猫の舌はざらざらしてるじゃないですか」

猫を飼うのは初めてだったので、最初に舐められたときは驚いた。ま

るで紙やすりでこすられているような気がした。
「それで刺激されたのか、それとも猫の唾液に有効な成分があるのか、髪の毛が増えてきたような気がするんです」
　嘘ではなかった。祖父、父親と、禿頭の遺伝子を受け継いでいるので、いずれは自分もそうなると覚悟していた。高価な養毛剤を試したこともあるのだが、効果を実感することはなかった。
「そういえば、かなり昔のことですが、牛に頭を舐められて毛が生えてきたというニュースを見た記憶があります」
　周さんの言葉に、古い記憶が掘り起こされた。
「これ、商売になるんじゃないですかね。都会では今、猫カフェが流行っているというじゃないですか。猫カフェに発毛のエステを併設すれば、大繁盛するかもしれませんよ」
　冗談だが、ほんのちょっぴり色気もある。古本屋よりも商売になりそうだ。
「甘いんだよ」
　山本さんが声を張り上げた。そして、かぶっていたハンティングの帽子を掴んで頭から外した。見事なスキンヘッド……、お坊さんなので当然か。
「マギに子猫が五匹も生まれたことがある。かわいかったんで、しばらく家に置いてたんだが、一匹がおれの頭をペロペロやり始めてな。ちょっと痛かったけど我慢していたら、子猫全員が来やがった。マギも一緒になってペロペロだ」
　そのときの感触を想像してしまい、頭がむず痒くなった。
「あのときは、まだ少し毛が残ってたんだ。たぶん、毛根まで舐め取られてしまったんだな。今じゃ産毛も生えてこねえよ」
　山本さんの顔をじっと見た。とんでもないほら話で人を煙に巻くことがある。
「ところで、周さんのマスク、どうしたんですか？　わたしと同じ、猫の毛アレルギーですか？」
　スルーすることにした。
「いや、お恥ずかしい。マタタビ酒というものをお土産でもらったので、指先に付けてにおいを嗅いでいたのです。それに寅が気付きましてね。マタタビ酒が鼻先についたのか、わたしの鼻をペロペロと舐め出したんです。おもしろいので、酒をたっぷり鼻に塗ったらこの有様です」
　周さんがマスクを外した。わたしはアッと声を上げた。鼻が舐め取られてのっぺらぼう……、いや、すぐに肌色の大きな絆創膏が貼ってあるのに気づいた。
「酔っぱらった寅に、鼻をかぶりとやられましてね」
　猫も悪酔いすると大虎になるようだ。

≪参考文献≫
「ひろしまの民話（昔話編）第二集」（中国放送編集 第一法規出版）
「游仙枕（中国昔話大集）」（話梅子編・訳 アルファポリス文庫）

まちの古本屋さん
どら書房
古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

・無料本、百円本、50 円本などのコーナー。
　無料の漫画ルームもあります。
・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
※九日市の開催日は定休日でも開店します。

●庄原市中本町 2-1-10　●定休日：毎週月・火曜日
●営業時間 :9:30~19:00　●TEL: 090(9913)3052
※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

＜広告料 1/4 ページ 1 回 2,000 円 半年間 9,000 円 1 年間 15,000 円＞

今月の3冊

どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「AV ビジネスの衝撃」

中村淳彦 著　小学館新書

アダルトビデオは、ビデオデッキの普及に伴って巨大産業へと成長、当時の有名な裏話がある。某大手電気メーカーが AV 業者に依頼して裏ビデオを制作、ビデオデッキのおまけに付けたという。これが大当たりで、ビデオ戦争は VHS がベータに勝利した……。

巨利を貪った AV 産業も、インターネットの登場で衰退の一途。ネット配信で安価に視聴できる上に、海賊版が大量に出回っている。海外では「なんでもやってくれる天使」だと日本の AV 女優が大人気、その知名度は大リーグのイチローに匹敵するほどだという。AV 男優のインタビューも興味津々。エロ事師たちの栄枯盛衰の物語は、AV 版の三国志だ。

「白磁の人」

江宮隆之 著　河出書房新社

「いいか巧、人間の仕事に貴賤などない。人種というものにも上下はない。人の価値はな、どう生きたか、にあって地位や金銭ではどうにもならん」、浅川巧の祖父の言葉だ。巧が朝鮮半島に渡ったのは大正3年、24歳のとき。日韓併合で日本人が我がもの顔で闊歩する中、朝鮮語を習い、朝鮮の衣装を着て過ごした。

巧は林業試験場に勤務して、荒廃した山野の緑化に奔走。一方、生活雑器として扱われていた朝鮮白磁の美しさに刮目、その収集と保存に尽力。親交の深い柳宗悦の「民芸」運動にも多大な影響を与えた。「白磁のような人」と慕われた巧は40歳で急逝、今もソウル郊外の墓所で瞑っている。

「猟犬探偵」

稲見一良 著　新潮社

北摂の能勢の広大な山林で暮らす竜門卓は、猟犬専門の探偵業を看板に掲げている。しかし、依頼される仕事は盲導犬、トナカイ、競走馬の捜索と風変わりなものばかり。タフガイで強面だが心優しい「猟犬探偵」の、薪ストーブのように暖かい短編集。

竜門の相棒の猟犬、ジョーが頼もしい。狼に似た風貌で、手負いの猪にも怯まない。電柱を再利用したロッジでのシンプルな生活は男のロマン。読者に阿るような小細工は無用。骨太のハードボイルドは、癌を患いながら執筆した作者の矜持、生きざまを反映している。稲見一良は 1994 年、63 歳で逝去。遺された本はわずか 9 冊、この本が遺作となった。

どら書房 ≪貸本屋システム≫

・店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば 3 割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引

・書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

どらくろ俳壇

神様に命をねだる水中花　近藤 昌平

万緑や農家民宿「ひげおやじ」　原 博己

つながれし犬と目のあう夕薄暑　片岡 正人

三年目片栗の花やっと咲き　隆愚

武勇伝悪友来りてスイカ喰う　赤川 冬人

※投句を歓迎します。

投稿＆寄稿

「ギャンブル」

M・A

カジノを含む統合型リゾート法案が、今国会で成立しそうだ。今でも賛否両論だが、私は日本にカジノがあってもいいと思うのだが、自分がやりたいとは思わない。

ギャンブルには還元率というものがあって、賭け金が戻ってくる割合のことをいう。例えば、還元率が70％だとすると、勝った時にユーザーに還元されるのは七割で、あとの三割は経費を含めた主催者の取り分として徴収されることになる。いわゆるテラ銭（場代）というやつ。

日本の公営競争の競馬、競輪、競艇、オートレースは、還元率約75％。宝くじが約45％、サッカーくじで約50％。日本での公営ギャンブルの還元率は、世界的に見ても非常に低いことで知られている。例えば、還元率45％の宝くじを千円で購入したとすると、その時点で価値が四百五十円になってしまうことを意味している。

日本独自のギャンブルであるパチンコの還元率は約85％で、人気があるのも頷ける。しかし、換金ができるパチンコは誰でもギャンブルだと認知しているのに、法律的にはどうして遊戯施設に分類されているのか理解できない。

カジノの還元率はどうなのだろう。スロットやルーレット、カードゲームなど種類によって違うが、平均して95％だと言われている。日本のカジノが、この世界基準よりも還元率を下げたら海外から誰もやって来ないので、同じくらいの還元率にするはずである。

95％ならちょっとやってみようか？　カジノは世界からギャンブラーが集まって来る。まさに、キング・オブ・ギャンブル。その95％の勝ち金を、海千山千のしたたかなギャンブラーから奪い取ることができるかどうか……。

気の弱い私が唯一はまったギャンブルがある。麻雀だ。見知った仲間と小遣い銭を賭けてやるだけのオアソビだが、プライドがかかっているから真剣だ。自分の技量や運がすべてという安心感もある。タバコの煙りが充満する雀荘で、いつのまにか徹マン（徹夜麻雀）。気分は「麻雀放浪記」の坊や哲？　いやドサ建か。ペンネームの阿佐田哲也は、「朝だ徹夜だ」のもじりである。

真っ黄色の太陽を見上げながら、そのまま出社。「こんなことをしていてはいけない」と深く反省するのだが、週末になると雀荘に向かっている。若気のいたり……、今では楽しい想い出だ。大勝ちしたときでも、雀荘の場代で勝ち金が削られて、還元率は相当に低かったのかもしれない。

県北名作館①（※過去に発表された作品を紹介）

「のぞき」の話　第１回

米花 斌

「サァ　見たり、見たり、見たりィ。いまは眼鏡が空いてよく見えますよ。アイ　十銭、十銭っ」。昭和の初めころ比婆郡西城町（当時）の爾比都売（にひつめ）神社の秋祭りで、混雑する参拝客へ呼びかけるこんな「のぞき」の呼び込み風景が見られた。

　のぞき屋夫婦が屋台の両側に立って、かん高い声を張り上げ、台を叩きながら早口で絵物語をまくしたてる姿があった。客は屋台にはめこんだ眼鏡に顔をすりつけ、屁っぴり腰で劇画をのぞいた。劇画はレンズの拡大作用で眼前いっぱいに広がり、すごい迫力があった。夫婦が交互に「のぞき節」を唄い、物語の進行につれてひもを引っ張ると、釣り絵があがって劇画が差し替わる仕掛けになっていた。屋台をとりまく子どもたちも異常な興奮を覚えたものである。この「のぞき」が、県北の寺社の境内や街頭から姿を消したのは数十年も前のことである。

写真はイメージで本物ではありません。

　最近、こうした大道芸が「芸の原点」として価値を見直されている。昭和五十七年には、東京・浅草の大道芸人坂野比呂志さんが文部省から授賞している。しかし、「のぞき」の現状は、最後ののぞき屋といわれた大阪市住吉区の黒田種一さんから道具一切を譲り受けた佐賀県鹿島市の北園忠治さんが、五十六年八月に同市のデパートで復活公演しただけで、その後は老人ホームの慰問などでほそぼそと命脈を保っているありさま。出し物も「不如帰（ほととぎす）」「金色夜叉」「不貞の末路」の三組になってしまった。

　西城町にやって来たのぞき屋は、庄原市三日市のＡさん夫婦だった。先の爾比都売神社恒例の裸祭りや春の例大祭には、必ず屋台を掛けていた。やがて日華事変が起り、戦況が激しくなってくると、手のかかる「のぞき」は敬遠され、そのころ流行した紙芝居にとって代わられた。Ａさん夫婦も十二年廃業に追い込まれた。露天商の場所割りの世話をしていた同町明神町の平田専郎さん（故人）は「ありゃあ、ええ声ようしょうった」と懐かしがっていた。

「のぞき」の屋台は幅二メートルほどで、屋台を組み立てるには先ず、近所から調達したビールの空箱などを左右に重ねてその上に板を敷き渡す。次にその周りに柱を立ててつなぎ、正面に招き看板を掲げた。招き看板は中央の絵が中ネタ、両脇のものを袖、頭上に張ったものを天井と呼んでいた。極彩色の豪華けんらんたる看板で、中ネタと袖の絵は出し物を押し絵にした。また中ネタは左右に開くようになっており、カンノンと言った。天井は布製で絵が描かれ、中ネタの下にも牡丹の花を刺しゅうするなど幕が張ってあった。

（次号に続く）

◆「ひろしま備北文学」創刊号（一九九八年七月発行）からの転載です。◆

どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

ー 硬式テニス参加者募集 ー

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)
場所：三次運動公園の屋内＆屋外コート
・火曜日（9:30 ～ 12:00）
・水曜日（9:30 ～ 12:00）
・土曜日（10:00 ～ 12:00）
連絡先：中川 (☎080-5610-2376)

布でつくった紙芝居「なにぬの屋」

手遊びや布遊び、布芝居 2 本を上演。一緒に楽しく遊びましょう！

出演・構成：渋沢やこ
日時：7月13日（金）19 時から20時（開場18時45 分）
場所：庄原市田園文化センター 2 階（庄原市西本町 2－20－10）
鑑賞券（4 歳未満無料）：前売 1,200 円、当日 1,500 円（チケットはジョイフルで販売）
問合せ：「WAKU×２する感動を親子で味わう会」代表 石原春美（0824-73-0930）

《情報＆原稿を募集します!!》

●仲間募集　●教室＆講座案内
●イベント情報　●あなたの大切な本の紹介
●ボランティア・ライター（現地記者）募集！
※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

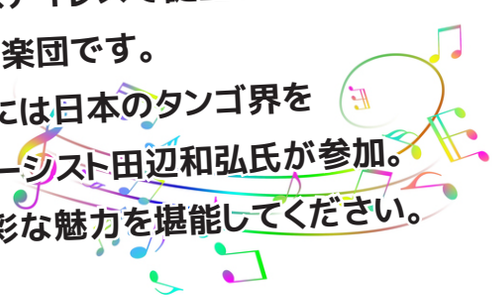
どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載しているので、ダウンロードしてお楽しみいただけます。

http://shobara.wix.com/dorakuroa

アルゼンチン・タンゴ “バリオ・シノ” がやってくる！

本場ブエノスアイレスで誕生した
タンゴ4重奏楽団です。
今回の公演には日本のタンゴ界を
代表するベーシスト田辺和弘氏が参加。
タンゴの多彩な魅力を堪能してください。



日時：7月28日（土）開演 14時30分
入場無料！
場所：楽笑座（庄原市西本町2-1-10）
TEL0824-72-8285
主催：楽笑座友の会

編集後記

◇サッカーのワールド・カップ、日本代表が大健闘ですね。前々回の南アフリカの岡田ジャパンと同じく、期待値が低い方がのびのびと戦えるのかもしれません。この号が出ているときには、予選リーグを突破できているかどうか結果が出ているのですが、もっと長く楽しませてほしいですね。

◇カープの交流戦は残念でした。悔しいですが、パ・リーグの方が実力は上のようです。この雪辱は日本シリーズで……、お願いしますよ。

◇群星伝で登場していただいた山崎さんに、もっと若い人を取り上げるべきだとアドバイスされました。情報を、切にお待ちしています。

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090（9913）3052（赤川）
e-mail：touzin@sannet.ne.jp
年間購読料：2,000円（郵送費込）

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会

第 210 回　しょうばらくんちいち

「庄原九日市」

平成30年　**7月9日**（月）9：00～13：00

庄原九日市とは？

天正年間（440年前）に物々交換で始まった市（いち）。
昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し2001年に復活。

TOPICS

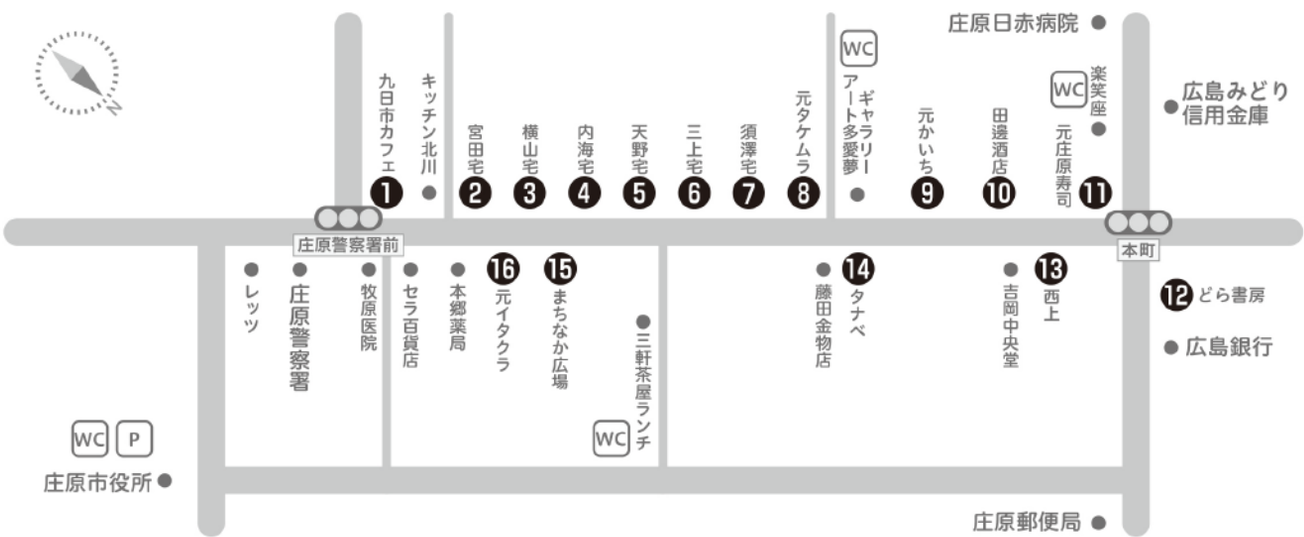
★市民ギャラリー「アート多愛夢」
➡庄原市シルバー人材センター竹細工グループ作品展
7月8日(日)～10日(火)　10時～16時

★どら書房
➡九日市の日は営業します。
月曜日と火曜日はお休み

★風龍
➡九日市スペシャル！ 餃子200円！

★楽笑座で「まかない食堂」「うた声喫茶」開催中。

出店配置図



❶ お休み

❷ タラワーフード

❸ 昭助
とらぢ
二八そば加工所
アーミッシュ
さだっさ
佐藤食販
健康企画グループ

❹ 郷屋
ぬくもり

❺ ちくちくはうす玉手箱
工房アム
かぐや姫

❻ 赤　堀
めだかの学校

❼ 農　楽　会

❽ 開　盛　社
アパレルゴトウ

❾ お休み

❿ お休み

⓫ お休み

⓬ お休み

⓭ 山本水産
くんえん工房 香豚
ハナビラタケ広島
花田ＦＦ

⓮ まなべ商事

⓯ 田崎屋
砂田海産
佐藤園芸
珈琲屋スプレモ

⓰ お福

出店申込みは、【毎月20日締切】コンパネ1枚スペース1,000円～　九日市愛好会事務局
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10 楽笑座内　TEL/FAX　0824－72－8285

ホームページ
http://www.kunchi-ichi.jp